

『明題部類抄』諸本系統に関する覚書

— 本文研究の視点から —

藏 中 さ や か

The Note on Medai-Buruisyo: from the Perspective of Main Text Study

KURANAKA Sayaka

要 旨

歌題集成書は、催事名、詠作機会やその年次、出題者名を記した後で、歌題を列記するという書記形式により歌題を集めたものである。初期の歌題集成書として研究対象になるのが『明題部類抄』という書である。稿者はこれまで歌題集成書に関する幾つかの考察を公表してきた。例えば、本誌第60巻2号に掲載した「歌題集成書の展開—明題部類抄を抄出する一事例を通して—」では、中世末から近世へと繋がりゆく歌題集成書の流れについて言及した。

従来、歌題集成書研究の視野は増補の在り方や異本の発生に関する問題へと拡がる傾向があった。本稿では『明題部類抄』の伝本そのものに立ち戻り、本文研究という視点から見出せる問題点を取り上げてみる。

『明題部類抄』の諸本については、先行研究により大きく三類に分けられる。七巻本である一、二類本と、別本を総括する三類本という分類である。本稿ではこれらのうち書写者と伝来の上から注目されるものを、各類から一本ずつ取り上げ、その本文について検討する。これまで歌題集成書の資料性に関わる言及は多くなされているが、本稿は、伝本研究という立場から本文異同や欠脱の発生を注視しつつ考察を加え、諸本関係を再検討するものである。

キーワード：中世文学、和歌文学、歌題集成書、明題部類抄

Abstract

Kadai compilations description style is characterized by listing the names of festivals and events, the years of *waka* poem compositions, and the names of *Kadai* subject proposers, followed by listing their titles. *Medai-buruisyo*, *Kadai* compilations of early date, has been focused on as a study subject. The author has published several papers on consideration of *Kadai* compilations. For example, *Kadai* compilations transition from the end of the Middle Ages to modern times has been described in the paper entitled 'Development of *Kadai* compilations: through an example extracting *Medai-buruisyo*' (KOBE COLLEGE STUDIES, VOL. 60 No. 2 (No. 171)). The scope in the study on *Kadai* compilations tended to expand into the issues of the way of enlarged editions and the generation of unique books in the previous studies. In this manuscript, the author highlighted the issues which can be noticed from the viewpoint of main text study, by revisiting the *Medai-buruisyo* traditional manuscript itself. The variant manuscripts of *Medai-Buruisyo* can be roughly classified into 3 categories of first and second group books comprised of 7 volumes, and third group book recapitulating other volumes, as indicated by previous work. In this study, a traditionally noticeable person of handwriting and a book from each group were selected, and their main contents were investigated. Although there have been many studies of *Kadai* compilations document data, the author re-investigated their relationships and gave some considerations by carefully looking at the differences and/or generated lack and omission of the main texts through the studies of traditional manuscripts.

Key words: Medieval Period literature, *waka* literature, *Kadai* compilations, *Medai-Buruisyo*

『明題部類抄』諸本系統に関する覚書 — 本文研究の視点から —

藏 中 さ や か

はじめに

稿者はこれまで歌題集成書に関する研究成果を公表し、本誌六〇巻二号（通巻一七一号）に掲載した「歌題集成書の展開—明題部類抄を抄出する一事例を通して—」では、中世末から近世へと繋がりゆく歌題集成書の受容の一型と全体的な傾向について言及した。

本稿では初期の歌題集成書を取り上げてみたい。本来、歌題集成書は、主催者と催事名、そしてその開催年月、出題者を明示した、和歌事蹟に関する記録の抜書といった形をとる。その代表が『明題部類抄』であるが、同書についてはその原初形態の本文が変容していく過程を詳論することよりも、諸本に所載される催事が如何に和歌史を埋めていくものであるのかという資料面を論じることが多かった。本稿ではこういったこれまでの研究動向を踏まえ、『明題部類抄』の伝本そのものに立ち戻り、本文研究という視点から見出すことのできる問題点を覚書として記しておきたい。

『明題部類抄』の諸本については、既に井上宗雄氏が「『明題部類抄』をめぐって—中世成立の歌題集成書の考察—」（鎌倉時代歌人伝の研

究）（風間書房 一九九七年三月）、以下井上著書と記す）で提示している。以下に、七巻本である一、二類本と別本を総括する三類本という分類と、それぞれの代表的な伝本の所蔵者等を簡略に示す。

一類本

（1）書陵部（五〇九・七）、陽明文庫

（2）書陵部（葉・一三八四）、同（四〇五・一二五）、蓬左文庫

二類本 永青文庫、島原松平文庫、版本（慶安三年刊記）等

三類本 資料編纂所、神宮文庫、防府天満宮等

活字本として提供されていること^②から二類本の版本が最も手に取りやすいものとなっているが、その本文には誤写もあり注意すべき点が少ない。このうち三類本は、『明題部類抄』が受容されていく過程で生まれた諸本で別本系統に相当し、一括りに示されているものの一本ずつを個別に検討していく必要がある。

本稿ではこれらのうち書写者、伝来の上から注目されるものについて、各類から一本ずつを取り上げ、その内容に検討を加える。歌題集成書の資料性に注目する井上著書には所収される催事に対する豊富な言及が見える。これに対して本稿では、本文研究という視点から本文異同や

注記の伝存状況をおさえながら考察を加える。これにより、伝本に固有の事象を浮き彫りにし、各伝本の諸本内での位置づけや相互関係を明確にしようとするものである。

まず一類本について考えてみたい。

一類本の(1)と(2)は、既に井上著書に示されているように、その奥書から(1)が上位伝本で、最も原初形態に近いものである。また奥書に関連する事項を除くと、(1)・(2)の大きな違いは、(2)が巻七末尾に増補部分をもつことである。本節では一類本全体に加え(1)自体の特徴も示しつつ、この系統に属する陽明本を取り上げてみたい。

一類本には一冊本と二冊本がある。二冊本の上下を区分する箇所は一定ではない。恐らく、本来は一冊本であり、個別に二冊本とするものが現れたのであろう。

井上著書は(2)では巻四の末尾近くまたは最末尾に奥書を記すことを指摘した。また後述するように陽明本は外題を『明題部類抄 上』としつつ巻四までである。これらから、「百首題上」「中」「下」の「中」という巻に相当する巻四までを一つの区切りとする本があったことがわかる。しかし(2)の書陵部(四〇五・二二五)本は巻三の「百首題上」までを上巻とする二冊本である。また(2)の書陵部(葉・一三八四)本は一冊本であるが、巻四の六催事目「百首 従二位家隆卿詠哥」の右肩に「至是ヨリ下巻也」と記し、その親本が巻の終わりと合致しないところで上下に分断される二冊仕立ての本であったことを窺わせる。

また増補前の原態を残す一類本に共通する事柄として、巻三の目録に永久百首を記しながらその本文部分は欠落しているという現象がある。この本文欠落は二類本では補われているが、これは二類本が催事の増補と配列替えをおこなったことと関わるのであろう。一類本と二類本の所収催事と配列の差異については井上著書に付け加えるのはこの点のみであるが、両者の書記形式の相違については確認しておきたい。

巻四から例を挙げると、一類本は「百首四季 年記可勘注之 入道光俊朝臣」の歌題を、部立てを設けて

春廿五首

早春五首

早春霞 早春雪 山早春 海早春 早春鶯

梅五首

白梅盛 紅梅遅 隣家梅 折梅花 梅浮水

のように、行を分けて記すが、二類本の例えば版本の場合は、

春廿五首

早春霞 早春雪 山早春 海早春

早春鶯 白梅盛 紅梅遅 隣家梅

折梅花 梅浮水 (下略)

と「早春五首」「梅五首」を略する。二類本は、概ねこのように行を少なくして歌題を連ねていく方向にある。

さて井上著書により(1)に分類されるのは二伝本のみである。うち一本が書陵部(五〇九・七)本で、実隆の奥書に「為重卿真跡」とあることから伝為重筆とされる。本文は一行に四題、一面七行書で非常に

ゆつたりと記される。

もう一本の陽明本（近一四二・四六）は一行に五題、一面一〇行書で紙面から受ける印象は随分異なる〔図版〕参照。茶表紙で包背装、鏤色の貼題簽に「明題部類抄 上」とあり、外題はその書跡から信尹筆、本文は別筆か。縦二六・五糎×横二〇・五糎、袋綴、墨付七二丁、遊紙前一丁、後ナシ。本文料紙は楮紙。内題・奥書なし、朱墨による注記あり。墨付七二丁目のオモテに最終二行を書写し現状ではこれが裏見返しである。特に後半は虫損が著しい。歌題集成書である『明題古今抄』が同じ装幀であり、⁽³⁾同時期の書写かと考えられる。尚、卷二の現存六帖題の第五帖と第六帖の間に錯簡がある。

卷一の為家千首題には、夏部の「朝更衣」「早苗多」「簷廬橋」「夕納涼」、「寄恋」の形になる恋部の「月」「霞」「雪」「山」「海」に、卷二の七百首題の雑百五十首の「古寺風嵐イ」⁽⁴⁾の計十箇所に鏤色の小紙片が付される。これらは当該本が実際に出題の際に参考とされた痕跡を示すものであろう。

卷一には建長七年の光俊出題の千首題と為家出題の千首題だけ載せるのが一類本であるが、陽明本は内題とこの巻の目録を欠く。本の現状から考えて書写時から内題、巻一目録は存しなかったと判断される。一類本における巻一部分の状況を見ると、(1)に分類される書陵部（五〇九・七）本は、内題、目録を備えるが、(2)に属する書陵部（四〇五・一二五）本は内題、目録を備えておらず、書陵部（葉・一三八四）本は内題を備えるが目録を欠く。

陽明本には、異本注記や訂正が見られる。例えば、同巻の為家千首の

無常題「寄風無常 寄雲無常 寄露無常」を載せる箇所に、次のような宋雅千首題の書き込みがある（□は虫損）。これについては他本に確認できず独自に付されたものと考えるべきか。

無常三 （宋雅千首□之三首也）
山眺望 野眺望 海眺望

寄風無常 寄雲無常 寄露無常

同じような注記は卷二の第一番目に記載される文永二年七月催行の「七百首 禅林寺殿御会」の春百三十首の中にも見える。当該箇所は次の通りである。

（梅）浮澗水 （梅）神子白殿（此行齋勸受向）
落衣 柳露 門、

同注記は書陵部（五〇九・七）本にもあり、本文は「衣」の右下に小字で「袖」を記し、ミセケチ符号はない。陽明本は「衣」に「袖」をイ本注記しているのだが、書陵部（四二五・一二五）本等では本文が「梅落袖」で記載されており、(1)と(2)の相違点となる。さらに同じ催事の恋百五十首寄の中に記される次の注記も見逃せない。

窓 （此哥阿様也） 簷 柱 床 庵

同注記は書陵部（五〇九・七）本、書陵部（葉・一三八四）本では「簷」字の下にあるが、書陵部（四二五・一二五）本にはない。(2)の中に同じ注記を伝えるものがある点は諸本系統を考える上で留意される。

また同じ七百首題の秋百三十題の項では末尾の三四題のみを記し、朱墨で「秋題落タリ」と注する。これは本来あったはずの八六題を当該本が脱落していることを示す。仮に一行に四題の書写であれば二三行分、五題であれば一八行分となり、一丁分というような規模での脱落が当該本の親本より上の段階であったのであろう。

また「三百六十首題 光俊出題」では各部の見出し下に注記が見える。

陽明本の記載は次の通りである。(一)内には実際の歌題数を記した。

「恋八十首」は「寄名所」と記すのみで次に「神祇十首」とある。

春七十首 (六八題)

夏三十首 但二首餘歟 (三二題)

秋七十首 但七十首□歟 (七〇題) *□は判読困難、「内」か

続いて書陵部(五〇九・七)本の場合を掲げ、陽明本と比較してみた。同本の記載は左の通りである。夏題は、注記通り受け取れば注が初めに加筆された時点で一題欠であったものが、その後書き加えられ二題増になっていたこととなる。「恋八十首」は陽明本と同じである。

春七十首 二首欠 (六八題)

夏三十首 一首欠 但二首餘歟 (三二題)

秋七十首 (七〇題) *注記なし

また(2)の書陵部(四〇五・一二五)本は注記がなく、歌題数は順に六七題、三二題、六九題で、恋部は「恋八十首 寄名所」とのみあり空白部分を設ける。

同じく(2)の書陵部(葉・一三八四)本は、春夏部に注記なく、六

七題、三二題で、秋部には

秋七十首 三首餘歟但し七十首内歟

と陽明本に近似する注記があり六九題を載せる。また恋部は

恋八十題 題不見如何

寄名 (空白)

とあり、「題不見如何」という注記を伴う。

陽明本の秋部の注記は判読困難な一字を含むが、(2)の書陵部(葉・一三八四)本と類似している。尚、寄物型恋題の名所が不記載である点は二類本でも補われていない。

続く「三百六十首題」において、陽明本は「懐旧十八首 寄植物動物等」の十八題目「蛙」を欠く。これは、十七題目「蜘蛛」の下に「螭イ字也」と注記したため次題が脱落したものであろう。書陵部(五〇九・七)本では確かに「蜘蛛」という用字で記されている。(2)に属する書陵部本二本は「蜘蛛」の用字である。また(1)・(2)とも「神祇三十六首」とあり歌題を記さないが(2)に属する二本は「題不見」を注記し、書陵部(四〇五・一二五)本は空白部を残す。

陽明本は、最後の文永十一年催行の「三百三十三首」を、目録では「三百三十首」、本文見出しでは「三百三十首題」とし、共に誤る。書陵部(五〇九・七)本は目録を「三百三十三首」、本文見出しを「三百三十三首題」と正しく記す。しかし(2)の書陵部(四〇五・一二五)本、同(葉・一三八四)本はともに目録を「三百三十首」とし、本文見出しを「三百三十三首題」と正しく表記する。陽明本の本文は独自に誤りを起こしているとも考えられるが、(2)に一致する。

同様に、目録と本文見出しに注目すると巻四の次の事例も挙げられる。

書陵部(五〇九・七)本で目録に「諸好士公重清輔已下十二人詠之」、本文見出しに「諸好士公重清輔已下二人詠之」とある百首題は、陽明本では目録に「諸好士公重清輔已下中二人詠之」、本文見出しに「諸好士公重清輔已下二人詠之」とあり異同がある。(2)の書陵部(四〇五・一二五)

本、同(葉・一三八四)本では目録に「諸好士公重清輔已下十二人詠之」、本文見出しに「諸好士 公重 清輔」とある。

陽明本は巻四までしか伝存しないため全体に及ぶ検討ができず、特に(1)・(2)の区分の根拠である巻七の増補部分の有無が不明である。⁵⁾しかし、一類本(1)と(2)の双方の特徴を残し、純粹に(1)と言いつけない部分を含む場合がある。少なくとも(1)書陵部(五〇九・七)本と直結する本文ではない。(1)から(2)へ至る過程の一本かと思量する。

二

本節では永青文庫本『明題部類抄』全一冊について述べる。

同書は、既に井上著書によって第二類本の伝本として次のように紹介される。

明題部類抄 北岡(永青)文庫(午卅六・一印)一冊(幽齋筆奥書)細川幽齋奥書本であるが、簡略に書誌を掲げると以下の通りである。

縹表紙、外題「明題部類抄」(貼題簽朱地、打ち付け書、右傍に「一印」(朱)とあり)、袋綴、墨付九二丁、遊紙前後各二丁、寄合書、縦二五・八糎×横二〇・〇糎、朱筆なし、墨によるミセケチ、補入、イ本注記や擦消訂正箇所あり、一面一二行書(但し一三行、一四行の紙面もあり)、「墨付九拾壹枚」という貼紙が墨付最終丁にある。

墨付最終丁に奥書「以三條羽林御本令書之校合訖」と署名、花押がある。「三條羽林」は三條西実条(一五七五〜一六四〇)のことで、例えば同じく永青文庫蔵の『八雲御抄私記称名』の奥書に「右一冊申請三條

羽林御本書写之遂校合畢」とあるように、実条所蔵の本を書写したものである。⁶⁾

ここでは最も広く流布している第二類本の版本との比較を通じて本書の書写状況の概略をまとめておく。

一冊に巻一から巻七までが書写されるが、巻毎の催事の収載状況は巻二と巻四〜巻七の各巻において、本文の脱落が発生している。特に、巻六末尾から巻七冒頭にかけての部分は大きく欠落しており、巻七は巻首を欠く状態である。

巻一には千首題四度を取める。巻一最終丁は二行のみで空白、次丁も空白でそのウラに巻二の目録が記される。

巻二は目録部分に七百首題以下の六度を記載するが本文の脱落がある。現存六帖題まであり、その後、欠。但し、一行脱落箇所は補入している。

百首題上にあたる巻三は二催事の題を記載し、版本と同じである。百首題中にあたる巻四は、目録部分に巻三との重複書写がある。本文は五催事まであり、その後、欠。目録部分の重複書写部分を「」で括る形で本文を提示すると次のようになる。／は割注内の改行を示す。

巻四

百首題中

和漢朗詠題新朗詠題同之

百首年記可勘註之／入道前大納言為家卿一夜百首

百首年記可勘註之／入道前大納言為家卿

百首年記可勘註之／入道前大納言為家卿

百首建久元年六月／前中納言定家卿等西三人詠之

百首年記可尋之／從二位家

隆卿詠寄

百首年記可尋之／諸好士公重清輔已下十二人詠之 四季百首年記可勘註之／入道
光俊朝臣

百首春 年記可勘註之／出題不知之 百首秋 年記可勘註之／出題不知
之 「オ

百首月 文永九年八月十五夜／入道前大納言 百首 年記可勘註之／出題不知之
「百首建保三年／光明峯寺入道前撰政家 于時／左大臣 百首貞永元年四月／洞
院撰政家

百首年記可勘註之／山階入道左大臣家 百首年記可勘註之／九条前内大臣
百首文永八年六月／中務卿親王家哥合 *ここまで巻三目録末尾部分
百首堀川院初度或云大納言公実卿勳進云々仍無院御製歟／年記可勘註之 「

*この一行巻三本文第一行目

一方、対応する本文は、建久元年六月百首歌の恋十五首の「おもかけに
こひわひぬ うちもねす」で丁切れし、以下脱落。次丁は巻五目録とな
る。校合の過程で目録部分の空白部分に巻三目録末尾が誤って加筆され
たものであろう。

百首題下にあたる巻五には一一催事を記載するが、文集百首部分の本
文を欠く。法文百首の最後である「以上妙経八巻中取百句為百題」の後、
五行分空白で丁切れ、次丁の第一行目に文集百首最終行となる「此身何
足歎一聚虚空塵」を記し、次の催事に移る。現状からは親本段階でこの
ような脱落現象を生じていたものと考えられる。また目録最後の「百首
同(四字)」は本文冒頭も「百首 四字」とあり、「四季」ではない。版
本には一番最後に記載される百首の記載はない。⁽⁷⁾

巻六には五十首以下の二〇催事の歌題を記載する。巻六最後から巻七

は目録部分にかけて本文脱落があり、巻六は光明峯寺十首で丁切れとな
り、一字抄題部分の本文をすべて欠く。しかし、目録部分には「一字抄
題 清輔朝臣／哥林苑題俊惠可上入之」が記されることから、本来は本文を備
えていたものと考えられる。この他、十首題部分に目移りによる誤写が
あり、建仁元年の新宮撰歌合の題が同年の八月十五夜歌合の題を繰り返
し書写する形になっている。

本来、巻七であるべきところは、巻首部分の目録が脱落することから、
形態上は巻六のように見える。巻七に該当する本文は、宝治元年の十首
からはじまる。同類本の版本と比べると、五首題が一催事多い、一首題
の配列二箇所が異なる、という相違点がある。版本に見えないのは

五首 正治二年十月十一日 新宮哥合

海辺霞 古寺郭公 林間月 山寺雨 社頭夕嵐
である。この他、三首題の中に三箇所誤脱が見える。また一首題の詠
作年次注記には「一本」・「イ」を伴う傍書があり、これらは版本を補う
ものとして注目される。

以上、永青文庫本は、三条西実条本を写したものでありその書写者も
明らかな本ということで注目すべき伝本の一つであるが、その本文自体
は、誤脱を含むものであることが明確になった。

三

防府天満宮本は、井上著書に「巻三まで一類本で、そのあと、すなわ
ち後半は『類題鈔』の一部を載せ、更に末の方に追加と思われる永和百
首と千首(二類本にある源恵の千首)等を付す興味深い本」で『類題鈔』

の一部との取合せが行われ、南北朝末期の催し物が付加され、早くも室町中期に書写されており（或は取合せや付加を行いつつ写した可能性もある）、大変興味深い」とあり、『類題抄（明題抄）影印と翻刻』（笠間書院 一九九四年一月）には書誌等も紹介されている（『図版』参照）。よってここでは書誌等は略し、防府天満宮編『防府天満宮神社誌（宝物編）』（二〇〇二年三月）に掲載される「〔奥書釈文〕」を再掲しておく。

此明題部類抄者招月庵

墨跡云々頃永寿被求出畢

尤為奇珍可有秘藏者也

慶長三年六月上旬

紹巴 七十五歳（花押）

此の明題部類抄は、招月庵墨跡云々。頃、永寿求められ出だし畢んぬ。尤も奇珍たり。秘藏有るべき者なり。

慶長三年六月上旬 七十五歳 紹巴（花押）

「外題奥書連哥師紹巴」とする琴山の極札を付随しており、右の奥書に

拠れば伝正徹筆本である。右の奥書のある最終丁の裏には

此紙数八拾八枚在之紹巴奥書

于時元和四年五月五日

と記されるが、この元和期の書き付けに示される「紙数八十八枚」については、紙数が現状の本文部分のみで九十九丁であることと合致せず、また「八十八枚」が現状の一部を指すとしても相当する箇所がどこであるのかが不明で、不審が残る。

本文には墨によるミセケチ、補入符による補入、イ本注記等がある。「一」で述べたように、巻三までを上巻とする一類本があることから、当該本は、そのような『明題部類抄』を書写したのであろうか。一類本の（一）か（二）かという点については、巻三までしか本文がないことから即断は難しいが検討材料はある。

注記の中に、（一）と一致する二箇所を指摘することができる。それは既に「一」で示した、巻二の文永二年七月催行の七百首題に記された「庇哥両様也」と「白川殿一座如此……」の注記である。この注記のうち前者は（一）・（二）双方に見え、後者は（二）には見えない。また巻二の「三百六十首題」における「懐旧十八首 寄植物動物等」の十七題目の用字について「一」で触れたが、当該本も「蜘蛛」という用字で記されている。よって当該本は一類本の中でも（一）の可能性が高いことを指摘しておきたい。

巻一から三まではすべて内題、目録を備え、巻三のあとは別の書物からの抜書が特に区分されることなく記される。その別の書物の筆頭が、『類題抄』であることは既に指摘のある通りである。『類題抄』からの抜書はすべて百首題で、元となった『明題部類抄』が百首の上までで中断していることを補うことを意図するものであったと考えられる。当該部分は永久百首から始まる。永久百首は『明題部類抄』一類本が目録に記載しながらその本文を欠脱しているところで、その欠脱を補い、以降、百首題を中心に抜き出し書写したのであろう。ただし、その取捨選択の指針は明確ではない。『類題抄』抜書部分のあとにさらに付加される末尾部分については、他の歌題集成書からの抜書なのか、個別の一次資料

からの抜粋なのかさえ判然としない。複数回にわたる増補が行われたかと推測するが、親本の段階で既に現状であったことは間違いない。歌題集成書が増補、抜粋されやすい本文の形であることは前稿で述べた通りであり、同一資料が形を変えながら転用されていく様についても論じたことがある。⁽⁹⁾

おわりに

『明題部類抄』諸本から三本を選びその本文を検討した。一類本については、完本のみを対象に導かれた従来の(1)・(2)という分類が果たして妥当なものなのかは再考する必要がある。この系統の新写本の出現は余り期待できないが、三類本に分類される諸本の詳細な検討を通じて新たな事柄を見出す可能性は残されている。『明題部類抄』という外題のもと、さまざまな歌題集成資料を併せ持つという形態は別本の総称である三類本の特徴であり、個別の内容吟味の必要性を一層強く感じる。今後の課題の一つである。

注

- (1) 「歌題集成書『明題古今抄』の伝本・構成とその資料的価値」(全国大学国語国文学会『文学・語学』第二〇〇号、二〇一一年七月)、拙著『尾崎雅嘉増補和歌明題部類 翻刻と解説』(青簡舎 二〇一三年三月)等。
- (2) 宗政五十緒ら編『明題部類抄』(新典社 一九九〇年一〇月)。
- (3) 『明題古今抄』については前掲注(1) 同論文、拙稿「井上宗雄氏蔵『明題古今抄』翻刻」(神戸女学院大学論集 第五六卷第一号 二〇〇九年六月)参照。『明題部類抄』と『明題古今抄』とは、裏表紙に朱墨による漢数字が、

『明題部類抄』に「四十八」、『明題古今抄』に「六十」と小さく記されている。両書については公益財団法人陽明文庫文庫長名和修先生よりご教示いただいた。特に記して御礼申し上げる。

- (4) (1) 書陵部(五〇九・七)本、(2)の書陵部(四〇五・一二五)本等では「古寺風」。
- (5) そもそも巻五以下を持つ本であったかどうか不明である。
- (6) この他、奥書に天正二十年(一五九二)三月と記す『清少納言枕草子』にも「三條羽林」本書写の旨が記される。
- (7) これは松平文庫本と同じである。
- (8) 松平文庫本にもある。
- (9) 拙稿「国立歴史民俗博物館蔵『組題集成』①について」(上)・「同」(下)『神戸女学院大学論集』第五七卷第一号・同二号 二〇一〇年六月・同年二月)参照。例えば、『類題抄』と重複する内容をもつ歌題集成書に「心種部類抄抜書」という内題で記されるものがある。

付記

本稿は学術研究助成基金助成金(基盤研究(C))課題番号二三五二〇二六五による研究の成果の一部として公表するものである。貴重な蔵書の閲覧、書影の掲載をご許可くださった関係各位に感謝申し上げます。

(原稿受理日 二〇一五年二月二二日)

陽明文庫本

【表見返し・卷一冒頭部分】

千首 皇武七年 其後 一頭朝賀 百首
 春上
 立春 三首 山早春 海早春 都早春 早春風
 早春雨 早春水 早春雪 暖地舞 暖地霞
 名園 廟殿 渡牛跡 浦殿 渡殿
 秋遊能 渡牛跡 朝中殿 子時書 若菜
 米若菜 香若菜時 摘若菜 原若菜 澤若菜
 田若菜 園若菜 水邊若菜 若菜 若菜
 持酒若菜 在時若菜 原若菜 摘若菜 若菜
 持酒若菜 在時若菜 原若菜 摘若菜 若菜

【卷一末尾・卷二目錄部分】

天 月 星 雨
 水 園 都 道
 松 菴 竹 松
 椿 柳 松 菊
 明題部歌抄卷二
 七百首以下數
 七百首 出題年 皇武二年七月七日
 現存六拾題 入皇武二年七月七日
 三百六十首 皇武二年七月七日
 三百六十首 皇武二年七月七日
 三百三十首 皇武二年七月七日
 七百首 皇武二年七月七日
 春百三十首
 春百三十首 皇武二年七月七日
 春百三十首 皇武二年七月七日

【卷二末尾・卷四目錄部分】

野橋衣 誰的 松里 水冷 揚進若 暮秋
 冬十五首
 初冬 國春 暮 謝世 時 面 故 御 暮 冬 里 月
 秋落菊 冬 澤 露 海 邊 冬 鶴 岸 千 島 沼 水 鳥
 芳 邊 水 水 踏 勤 雪 冬 池 雪 嚴 樹 澤 雪 威 著
 春 冬 十五首
 春 冬 十五首 二 三 冬 二 七 若 山 三 三
 水 元
 雜十五首
 制路 古 歌 博 暮 煙 寄 杜 旅 山 家 燈
 古 寺 松 河 邊 鳥 海 懷 舊 晴 神 賦 夜 尺 教
 名 園 迷 懷 其二
 明題部歌抄卷四
 百首題中
 和 侯 朝 歌 題 新 朝 詠 題 同
 百首 皇武二年七月七日
 百首 皇武二年七月七日
 百首 皇武二年七月七日
 百首 皇武二年七月七日
 百首 皇武二年七月七日
 百首 皇武二年七月七日
 百首 皇武二年七月七日
 百首 皇武二年七月七日
 百首 皇武二年七月七日
 百首 皇武二年七月七日

防府天満宮本

【卷一 目録部分・冒頭】

明題部抄抄一
 十首題
 十首 建長寺 推大相頼朝 長安寺 金
 十首 教皇後朝
 十首 華嚴寺 長安寺 院之云
 十首 建長寺 推大相頼朝 長安寺 金
 十首 教皇後朝
 十首 華嚴寺 長安寺 院之云

春
 十首 建長寺 推大相頼朝 長安寺 金
 十首 教皇後朝
 十首 華嚴寺 長安寺 院之云

春
 十首 建長寺 推大相頼朝 長安寺 金
 十首 教皇後朝
 十首 華嚴寺 長安寺 院之云

【卷三 末尾・増補部分冒頭】

十首 建長寺 推大相頼朝 長安寺 金
 十首 教皇後朝
 十首 華嚴寺 長安寺 院之云

十首 建長寺 推大相頼朝 長安寺 金
 十首 教皇後朝
 十首 華嚴寺 長安寺 院之云

十首 建長寺 推大相頼朝 長安寺 金
 十首 教皇後朝
 十首 華嚴寺 長安寺 院之云

【増補部分末尾・奥書】

天象 地象 谷水 山家 田家
 草 木 鳥 獸 雜物
 猿 鹿 懷 鳥 夢 賦
 神祇 釋教 祝文

天象 地象 谷水 山家 田家
 草 木 鳥 獸 雜物
 猿 鹿 懷 鳥 夢 賦
 神祇 釋教 祝文

天象 地象 谷水 山家 田家
 草 木 鳥 獸 雜物
 猿 鹿 懷 鳥 夢 賦
 神祇 釋教 祝文